

---

# 国会議事堂占拠テロ（ifシリーズ第一作）

戦艦長門

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

国会議事堂占拠テロ（ifシリーズ第一作）

### 【Nコード】

N5848A

### 【作者名】

戦艦長門

### 【あらすじ】

今、世界で起こり得る「if」を題材にしたシリーズの第一作。某国の工作員により日本国治安維持機能は完全に麻痺。その隙を突き、上陸した工作員は呆気なく国会議事堂を占拠する。要求は日本国の全ミサイルを米国に発射すること。人質は日本政府首脳、国会議事堂職員、そして日本一億二千万の国民。さらに日本各地に潜んでいるNBC兵器を保持した「工作員」の恐怖。そんな窮地に立たされた日本を救う鍵を握ったのは、たった五人の高校生だった。そのとき世界は、日本はどうなるのかの「if」。

## プロローグ（前書き）

この作品は完全にフィクションであり、  
実在に存在する国家、人物などとは一切関係ありません。  
また、登場する兵器等、現実と類似しているものが  
多々登場しますが、一切関係ありません。

## ブローグ

20XX年4月13日、東北地方日本海

某国からの武装工作員の部隊が武装艇で領海に侵入。

領海侵犯を止めに向かった最新イージス艦、

DDG-177「しおかぜ」は謎の爆発により爆沈、

同じく上空警戒中だったP-3も謎の墜落を起こした。

それと時を同じくして各所の自衛隊基地、警察署等でも謎の爆発が続出、

日本国治安維持機能は完全に麻痺。

その混乱に乘じ工作員部隊は上陸、国会議事堂を呆気なく占拠した。

工作員部隊の要求は、米国に対する全ミサイルによるミサイル攻撃。人質は日本政府首脳、国会議事堂職員、そして日本一億二千万の国民。

対策を立てるべく東京都庁が対策委員会兼一時の政府となる。

しかし自衛隊の指揮権は日本政府にあり、法律に縛られた自衛隊は身動きが取れない。

さらに日本各地に潜んでいるNBC兵器（核、生物及び化学兵器の事）を保持した「工作員」の恐怖。

そんなとき、日本は、世界はどうなるのかの「if」

## 第一章・第一話

20XX年海上自衛隊イージス護衛艦DDG-177「しおかぜ」艦上

部屋にノックの音が響く。

「入れ。」

「失礼します。大嶋艦長、防衛庁より緊急の入電です。」  
1曹に封筒を渡される。

「ありがとうございます。」

「それでは、失礼します。」

口では言いつつも少しも大嶋は感謝していなかった。

（少しの休息の時間なのだから少しぐらいは休ませて欲しい・・・  
それに今は寄港中だというのに何を伝えようと言っただ・・・）

心では呟いても、そのようなことを口走れば士官からも下士官からも信用を失うことは避けられなかった。

大嶋はやけに嚴重に閉じてある封筒をあけ、紙を開く。

そこには信じられないことが書いてあった。

「発・防衛庁 宛・しおかぜ艦長・大嶋二等海佐

国籍不明の不審船が領海を侵犯。

旧ソ連製対戦車ミサイルと思われるロケット弾により不意をつき護衛艦「しらね」級DDH-145が撃沈され、

上空警戒中だった哨戒ヘリコプターSH-60J二機が旧ソ連製対空ミサイルと思われるロケット弾により撃墜された。

現在護衛艦DDG-178きりやまが不審船撃沈のために急行中。

直ちに貴艦もきりやまと同じ座標へ向かい、不審船を撃沈すること。

これは訓練ではない。」

（・・・なんだ？これ？）

読み終えた今でも信じられない。

（不審船？自衛艦撃沈？そんな・・・！）

しかし訓練ではないと書いてある。

自分と同じ自衛官が死んだ。

不審船の攻撃で。

それだけがはつきりして、妙な気分だった。

ただ、今やることは、CICに向かい、緊急放送の後きりやまと同じ座標に向かうこと。

そして不審船を沈めること。

そう自分で理解した。

受話器をとり、CICを呼び出す。

「こちらCIC。」

「艦長だ。直ちに幹部をCICに集合させて、クルーは全員食堂に集合。」

・・・実戦だ。」

最後の言葉は言うのをためらったが、

やはり、少しぐらい噂がされてからの方が激しいショックは少ないだろう。

「艦長・・・？」

「もう一度繰り返す。これは訓練ではない。実戦だ。

詳しいことはCICで話す。その後緊急放送だ。」

「・・・」

「返事はっ?！」

「了解・・・しました。」

やはりショックを受けるか・・・日本にとって実戦など50年ぶりだ。

自分でも経験したことは無い。

大嶋はCICにむかってゆっくりと歩き始めた。

## 第一章・第二話

海上自衛隊イージス艦DDG-177「しおかぜ」

「総員、これは訓練ではない。繰り返す。これは訓練ではない。一気にざわめきが広がる。」

「総員落ち着いて行動するように。」

そう締めくくり艦長は緊急放送を終えた。

今ちようど説明があつた。

（畜生、もう工作船の領海侵犯がばれたのか・・・）

「黒河先輩！」

後ろから後輩が声をかける。

「大変なことになりましたね。どうすれば、」

「うるさいっ！今から忙しいんだ！実戦だぞ！暢気なことってないで

配置につけ配置につ！」

思わず叫んでしまう。

「せ、先輩？」

「ほら、あっちいけよ。」

「・・・」

黙って絶望だとしても言わん限りの顔をしてトボトボと歩いていく。

（頼らなければ生きていけないような、日本人にもう用はない・・・）

そう、黒河は工作員だった。

それも朝鮮半島に本部を置く「世界統一機構」の、である。

子供のときから両親も、祖父も祖母も工作員だった。

「黒河」と言う名前は偽名らしいが、気に入ったから使っている。

それに都合がいい。日本人に国籍上なっていないなくても勝手に日本人だと思っていてくれるのだから。



一度首領様にも会ったことがあり、自衛隊にはかなりの工作員の数が潜んでいるそうだ。

すくなくとも、護衛艦一隻あたりに一人ぐらいで。

俺の任務は爆弾で護衛艦を爆弾に設置後、秘密裏に脱出、工作員部隊との合流だった。

やけに嚴重な箱のスイッチを一回置いてどこかに置いておくだけで遠隔操作ができるようになるそうだ。

そして爆発して「しおかぜ」は海の藻屑となる。

タイミングは、この船が不審船を攻撃する少し前。だから今から仕掛けて逃げてもいいだろう。

仕掛ける場所は、CIC。

あそこが吹き飛べば実質「しおかぜ」は行動不能になる。多少良心が疼くが、祖国のため、そして世界のためだ。

早速CICに向かって箱を持って歩く。

見つからないはずだ。

なぜならここはCICのすぐ近くで、その上総員戦闘配置されている。

ちようどいいロッカーを見つけ、タイマーを五分に設定し、スイッチを押した

途端に目の前が真っ赤になり、真っ暗になった。

直感で分かった。

「裏切られた」のだと。

ただ単に、自分は利用されたのだと。

痛みなどなく、ただ意識が消えていった。

D  
D  
G  
-  
1  
7  
7  
「しおかぜ」、  
小型核爆弾の内部爆発により爆沈

## 第一章・第三話

六本木防衛庁情報部

「大変です！赤山さん、これ見てください！」

大川が司令室に駆け込んでくる。

「どうした、大川？」

「十分前、核爆発と思われる爆発によりしおかぜ、きりやまが爆沈、P-3も原因不明の爆発により墜落しました！」

その他哨戒ヘリコプター数機がミサイルにより撃墜された模様です  
っ！」

「何・・・全て不審船の攻撃か？」

「いえ、しおかぜ、きりやま、P-3は内部からの爆発です。」

「となると・・・自爆工作員か？」

「かもしれません。」

「他の情報は？」

「東北地方の基地において謎の爆発が多発しています。」

「・・・自衛隊に工作員を埋め込まれたか・・・」

これはテロどころのレベルではない。

既に少しの情報は得ていたが完全ではなかった。

「それで、不審船についての情報などは？」

「は。偵察衛星によると中型の偽装漁船です。」

ロケット弾などの装備が確認できました。」

「なるほど・・・それでは沿岸周辺の陸自部隊で迎撃を。」

「いえ、爆発により東北地方の自衛隊は完全に麻痺していますから・・・」

「そうか・・・」

「最早、情報部で何とかできる状態ではなくなりました。」

「確かにそうだ。幕僚本部へ連絡を入れてくれ。情報部ではもう無理だと。」

「了解しました。それでは・・・」

大川が腰から小型のサイレンサー付の拳銃を取り出す。

「な、何のつもりだ?!」

「存在意義の無くなった情報部はいらないだろう？」

それに我ら”世界統一機構”の邪魔になるものは全て排除するよ  
うに言われている。

いつ情報部が息を吹き返すか分からないしな。」

「ま、待てっ!」

「まだ、何か？」

「いつから、いつから私を裏切っていた!」

「裏切る?裏切ってなんかいませんよ。貴方が、そう思い込んでい  
るだけでね。」

押し殺された発砲音が響き、ドアを閉め大川は幕僚本部に向かって  
歩いていった

## 第一章・第四話

東北地方沿岸武装工作員部隊上陸地点

「サム、どうした？」

部隊長である「ゴールド」ことキムに声をかけられる。我々は本名とは別の名前を用意し、それを使っている。自分が生き延びるためではない。

しかも我々は「死んでいるはずの人間」、もしくは「死ななければいけない人間」の集団なのだ。既に死ぬ覚悟は出来ている。

本名を使わずに敢えてアメリカ流のコードネームを使うのは通信の際に聞き取りにくい、言いにくいという理由からだった。

「なんでもないです。ゴールド部隊長。」

「それならいい。もうすぐその車道を通る車を奪って東京へ向かう。スコーピオンを用意しておいてくれ。」

「はっ。」

キム、部隊長のコードネームは「ゴールド」だった。日本語で「金」と書くのでそれとかけているらしい。

ただ、部隊の中で俺だけには名前が無い。

生まれたときから「一流武装工作員」として育てられ、コードネームとも本名とも言える「サム」として生きてきた。

こんな人生に未練は無い。

それなら俺を育ててくれた「世界統一機構」に恩返しをしよう。

そう思い俺は「薬品工場の爆発で死んだ」ことになり、世界統一機構の作業員として日本に上陸した。

「サム副隊長！ゴールド部隊長が呼びです。．．．いよいよですね。」

「わかった。スコピオンを用意してもっていくっておいでくれ。」

「了解しました。伝えます。」

そうしてサムは人気の無い浜辺に突っ込んで座礁している工作船に歩み寄っていった．．．

## 第一章・第五話

### 東京国会議事堂待合室

「なあ、福山。俺らつて明らかに場違いだよな？」

隣に座っている藤田が話しかけてくる。

「仕方ないだろ。高校の卒業グループレポートで日本の政治・国会の問題点なんて糞みたいなテーマになってしまったんだから。」

「でもよー福山よ、このメンバーだぜ？」

そりゃあまともなものはできるかもしれないよ？でも楽しみが無いって。」言われてみればそれは確かにそうだ。

五人のグループなのだが、そのメンバーと言うのが・・・

「福山だろ、それから俺だろ、生徒会の秋葉に、無口な岩代、熱血野球野郎の高波だろー・・・」

しかも泊まりだぜ？二泊三日。」

「それは知ってるよ。まあでも俺ら二人が一緒のグループに入れただけでもいいじゃねーか」

それに泊まりも国会の係員の人が用意してくれるんだろ。」

「そうだけだよ・・・まあしかし北海道からわざわざ来るとはな・・・」

「ああ・・・」

言いながら周りを見る。

スーツに身を包んだ議員らしき男、外国人らしき者など、

確かに学校の制服を着ている俺たちは場違いといった感じがした。

「みなさん、遅くなりました。係の赤坂です。」

「三日間、どうぞよろしくお願いいたします。代表者の秋葉です。」  
秋葉が名詞を交換する。

「しかし・・・なんであいつがリーダーなんだ？」

「しかたないだろ、ほら、静かにして黙ってるって。」

「・・・あいよ。」

「それではご案内します。」

「はい。」

そして俺たち五人はその職員についていった。

それが、悪夢の始まりになるうとは、夢にも思わずに・・・



## 第二章・第一話

### 国会議事堂待合室

突然、部屋を爆音と激しい振動が襲った。

「うわ?!」

藤田が椅子から転げ落ちる。

ちょうど俺たち以外誰もいない待合室で案内の赤坂さんに話を聞いていたのだが・・・

「何があつたんだあ?!」

高波がやたらにでかい声で叫ぶ。

俺は声も出ない。

秋葉は地震だと思っているのか頭をノートで押さえている。

岩代は不気味に落ち着いて不思議そうにあたりを見回している。

「遂に来た・・・か。」

赤坂さんが何か呟く。

「なんですか?」

考える前に俺は聞いた。

「テロだ。」

赤坂さんが答える。

「は・・・?」

「え?」

「な・・・に・・・?」

全員がその落ち着いた、現実離れた発言に耳を集中させている。

「テロ。朝鮮系テロ組織の、だ。」

「そんな・・・」

「ニュース見てないのか? 工作員が上陸したかもしれないって大騒ぎだぞ。」

「昨日は、そんな暇、無かったから・・・」

「まあいい。俺は隠していたが本名は赤坂ではない。」

中華人民解放軍情報局の工作員。といっても奴らを止めるためのな。朝鮮系テロリストが日本を乗っ取れば我らの国家も大きな影響を受ける。

それを避けるために潜入した。」

「・・・？」

全員が分からないといった顔だ。もちろん俺もだが。

「つまり、だ。俺の任務は出来る限りの国会議事堂内の人間を生き  
て脱出させること。」

もちろんお前らも対象だ。」

「と、いうことは・・・」

「あなたは味方と言うわけですね？」

秋葉と藤田が言う。

「そうだ。だがここは入り口に近すぎる。」

おそらく先程の爆発音は玄関を吹き飛ばした音だろう。

じきにここへ来る。」

「うわああああ！嫌だあああ！」

急に高波が叫びだす。

「死にたくない！死にたくないいいいいいつ！」

「馬鹿、大声を出すなっ！」

「こつちで人の声がしたぞ！」

遠くで声が聞こえる。

「仕方ない、俺はこのまま敵を引き付けていく、その隙にお前らは  
逃げる！」

「は、はい！」

「じゃあなっ！」

赤坂・・・いやその人はスーツケースから小型のサブマシンガンを  
二挺だし、

廊下へ飛び出て行った。

部屋に沈黙が流れる。

「・・・どうする？」

俺が聞く。

「そりゃ、逃げる。」

藤田が当たり前だと言わんばかりに答える。

「でも、もう少しすれば騒ぎは収まるはずよ、それまで待ってから・  
・・」

秋葉が反論する。

「・・・無駄よ。玄関に近すぎるし、高波のせいでここに誰かいる  
って言うのはもうばれてる。」

相変わらず口数少なく岩代が反論する。

「でも、でもこのままじゃ殺されるじゃないか！」

高波は必死だ。

「とりあえず暫く様子を見ましょう。」

秋葉がまとめる。

途端、廊下で軽い発砲音と赤坂の叫び声が響く。

「見つけたぞ！」

「畜生、数が多すぎる！」

約束通り赤坂は引き付けてくれているようだ。

廊下の外で会話が聞こえる。

「おい、お前ちょっとこの部屋の中調べとけ！」

「あ、はい。」

「んじゃ俺らはあいつを追う、任せた。」

「了解。」

「やばい！」

藤田が叫ぶ。

ドアが開き、完全武装の兵士が入ってくる。

「いたか・・・って、ガキかよ。まあいい、誰から殺して欲しいんだ？」

兵士が銃を向ける。

「おおお、俺以外からでお願いしますう！」

高波が叫ぶ。もう熱血の野球部のホームラン王兼主将には見えない。

「ふん、なかなか正直な奴だ・・・お前だけは殺さないでこつ。」

「あ、ありがとうございますう！」

「なんて言うわけ無いだろ！まずはお前から、ぐっ！」

途中で叫び声が中断され、兵士の喉から鮮血が吹き出る。

ナイフが二本刺さっている。

「うひゃああああ？！」

高波が気絶して後ろに倒れる。

「誰が・・・?!」

今にも吐きそうな顔で秋葉が聞く。

「私がやった。」

岩代が淡々と言う。

「え?!どうやって・・・」

俺が聞く。俺もこの兵士の死体は見たくない。グロテスクすぎる。

「昔、変な奴に襲われて、逃げて助かったけど無力感を感じてね。自衛のために習得したの。」

いいつつ平気な顔で岩代は兵士の首からナイフを抜き取る。

軽く拭いて、鞘にしまった。

「うえ・・・こいつ本当に女子か？よくこんな事できるな・・・」

藤田が見てられないとばかりに言う。

「・・・自分が死ぬよりは、こっちの方がいい。」

「そりゃ・・・そうだけど・・・」

大川がかなり怖がりながら言う。

「でもまあ、こんなのも手に入ったし。はやく脱出したほうが。」

言いつつ兵士の持っているライフルをとり、二、三発壁に撃つ。

「うわぁ！」

秋葉は完全にビビッている。

「アブトマツトカラシニコフ47か・・・弾薬もあるしなんとか脱出できそうね。」

「ちょ・・・岩代、何でそんなことを・・・」

「趣味。悪い？」

「いや、別に・・・」

もう藤田は怖がりすぎだな。まあ俺もだが。

「動くな！」

ドアが開き、一人の兵士が入ってくる。

「流石にそんなことは無いと思ったが・・・よくも俺の仲間を・・・」

「

もう、終わりか

## 第二章・第二話

### 国会議事堂待合室

「ははは・・・もう逃げ道は無い。敵討ちをさせてもらっぜ・・・  
うおっと！」

「うぐあっ！」

兵士が構えている銃が火を噴き、岩代が後ろに飛ぶように倒れた。  
持っていたらしいナイフや、先程殺した兵士から奪った装備品が飛び散る。

「油断ならない奴だ。ナイフを持ってやがるとはな・・・」  
どうやら岩代がナイフを投げようとしたところの手首を撃ったようだ。

「じゃあ、まず厄介なあんたから死んでもらうか。」

「ふあ・・・何？」

後ろで寝ぼけた声をする・・・高波だ。

「何だ？お前は？！」

「うひゃああああ！ぼつ、僕は別に怪しいものじゃないです、はい！  
だから殺さないでえええええっ！」

「・・・俺、お前みたいな奴一番嫌いなんだよな・・・殺してやるよ。」

「そんな、そんなの嫌だああ！」

俺、つまり福山としては、高波は死んでも別段かまわないのだが。

「う、動くなあ！動けば、撃ちますよ！」

振り向くと後ろで岩代が落としたライフルを構えて兵士に銃口を向けている。

「ふん、撃てる訳がない。ほら、撃ってみろよ？」

「だ、だから動くなと・・・」

「無駄無駄。」

兵士は銃をなし、紐で肩にかけた状態でこちらに歩いてくる。

カシャツ・・・

秋葉が引き金を引く。だが出てきたのは引いた音だけで、轟音も、弾もでなかった。

「な、何で?!」

「馬鹿だなー日本の学生は・・・」

「秋葉さん、持ち手の上の棒を引っ張って!」

「え?!わ、わかった!」

秋葉がなにやら触っている。

「ま、待てえ!!!!」

兵士は必死の形相で肩にかけた銃を構えようとするが、完全に動揺して銃を落としてしまった。

「棒が動いたら、撃って!」

岩代が叫ぶ。

「うんっ!」

途端、部屋中に轟音が響き、兵士は血の霧に包まれた。

「や、やった・・・」

何故か秋葉まで後ろに倒れている。

「す、凄い反動・・・」

「馬鹿、引きすぎ。」

岩代の冷静な突っ込み(?)が入る。

「助かった・・・でも、私は人を殺してしまった・・・」

秋葉は絶望だと言う顔に変わる。

「殺らないと、殺られる。それならあなたは自衛か、自己犠牲か、どっちを選ぶの?」

岩代の声が、妙に静かな部屋に響いた・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5848a/>

---

国会議事堂占拠テロ（ifシリーズ第一作）

2010年12月17日02時51分発行